

A black and white photograph of a mountain valley. The background shows steep, rocky mountain slopes. In the middle ground, a suspension bridge spans across a rocky stream bed. The foreground is filled with dense, leafless trees and shrubs. The overall scene is rugged and natural.

はくさん

第2巻 第4号

石川県白山自然保護センター

も く じ

〈白山麓白峰〉聞き書き(1) さ る……………加藤勇京・織田日出夫…	1
白山の印籠石……………松尾秀邦…	3
白山のツキノワグマ I 冬の生活一穴ごもり ……花井正光…	4
山 日 記……………	6
山 荘 深・秋……………山本清嗣…	6
石川県の自然公園 6	
能登半島国定公園……………	7
た よ り……………	8

表紙解説

つ り 橋 (別当出合)

深い溪谷を結ぶ一本のつり橋、旅人がそこを通るとゆらり、ゆらりと揺れて四季折々の風を感じさせます。

ある所では、何十年も前に、その何年前と同じように、村人が総出で山から材料になるふじ、つたかずらの類を伐採し、山のつり橋を架け替えたのでしょう。谷の雪どけ水に誘われて青い芽をふく春の頃、全山紅葉の秋の頃にも、山の橋につり橋はいかにも似つかわしい。

別当出合つり橋は、砂防新道を登る人はみんな通るつり橋で、数多くある白山のつり橋の中で一番利用されています。白山に登る人がある限り、このつり橋はいつまでも揺れ続けるでしょう。

〈自然保護課〉

〈白山麓白峰〉 聞き書き (1)

さ る

話者 加藤 勇 京

筆者 織 田 日出夫

越前と加賀の境に、加賀^{がた}の方になるのですけど大長（おうちょう）という山がある。大長山（だいちょうやま）というて、そのうしろの方に、越前の方に、カラスっていう岩壁のでっかい山があって、その壁に、20余りのさるの群があったらしいです。

そのカラスのさるは、どういう性質を持っているか知らぬけれども、怪我をするというて、みなてんでんに怪我したさるのそこへ見舞にきて、その傷口をむいて見るがやって、ほいと（それに）まいにちまいにちに、その交代にきて、傷口をむいて見るもんじゃさかいに、ほうすつと（そうすると）怪我したさるは、群を逃げてくるわけです。

その逃げたのが、加賀の方の白峰の方の山へ、ちょいちょいと、むかしはさるがきておったわけや、そしてそのさるは、たいてい、どこかに傷をしておる。そいで（それで）、白峰あたりの猟師が、今はそういうものは禁止になっておるけど、むかしは猟師が鉄砲でうって、ちょいちょいと獲ったことがあるのです。

猟師がさるを一匹みだすと、なぜどこまでぼうていっても獲ったということは、肉ももっともうまいものですけど、その胆がたいへんに、この一むかし産病人の薬で、その産^{さん}を生んでしもうたら、ぜったいに飲ますことならんけど、生む前に、そのさるの胆を飲

ますというて、たいへんに、その産は軽かったと。

いまのような病院へ行くということもなえし（ないし）、そういうええ（よい）医者もなかったもんじゃから。

さるの胆を、もう、子を産むようになると飲ました。一度飲んだら、もう、絶対に飲ますことならん。そういうききめのある胆じゃから、さるを一匹見つけても、まあ、猟師は、どこまでいっても、後をおいかけていって獲ったもんです。

そいで、いま、どういう関係か知らんけど、さるは白峰の方へも回ってこんし、また、そのカラスにも、現在のところは一匹もおらんらしいです。そいで、たまに白峰の方へ回って来んことはないけれども、これは白山の中宮の方から回ってくるか、また、ほかから回って来るか知らんけど、まあ、今は白峰では、さるは見えんような状態です。

そいでなんです、私も若い時は、兵隊に行って来てから20年ほど、冬になると、商売でないけど、鉄砲うって、山へいって、いろいろけものを獲ったり、また、山うさぎが沢山おるところやったもんじゃから、山うさぎを獲ったり、熊をうったもんじゃ。

そいで、さるが、今からちょうど40年ほど前のことですが、白峰のありや（あれは）3

里ほど上の赤岩という村がある、その赤岩に
わしは生れたもんで、昭和9年の水害で白峰
へ来たもんですけど、その時分に、赤岩の部
落より、ちょっと7、8丁下に、鉄砲もって、
どっか山いってこうと思うておったら、さる
が川の向いから、来たもんじゃから、そいつ
をおうていって、赤岩の下のカヘイ山という
山で、それを、いとめて獲ったことがあります。

そいでその、さるというもんは、遠いところ
で見つけても、鉄砲で撃つという、自分を
いよいよ見つけて撃つと思うらしいですね。

そうすると、遠いところへむちゃくちゃに
撃つです。そうすると、さるは逃げていかず
に、さるは木へあがるとか、いばらへかかれ
るとかして、そして、そこにおる。雪のある
おりやから、後つけていって撃つ。

さるというもんは、おもしろいもんで、い
くら遠いところでも、さるを見つけたら、鉄
砲で撃つですね。

鉄砲で撃つという、その音を聞くという
と、自分を撃つやと覚悟してしまうらしい。
そいで、いくら遠くても、遠くいとこへ逃げ
ずに、木の上へあがるとか、また、いばらへ
かかれるとかする性質を持っているです。

そいやから、そこへいって、さるを撃つで
すわ、獲るですわ。

さるは、さるの肉というものは、たいへん
に美味しいもんです。これは現在の牛肉の味つ
てというということはないし、たいへんこう
ばしい、なんとも言へん味をするもんですわ。

それで、さるを獲るといって、皮を剥いで、
そして一番さきに胆を取るですわ。

胆は産病人、そして頭の痛いのが薬になる
ので、胆を取って、ほいて（そして）干して
薬にしておく。

それから、肉は足とか手を、料理してたべ
る。

皮は、さるとはあんまり縁起のえい（よい）
もんでないので、あんまり金にならんもんで
すわ。

そこでその、むかしの人は、さるの皮は、
たいへんおもしろいもんじゃから、どっかへ
持っていって売ってこういうて、さるの皮の
干したのを、まるけて、ほしてその、売りに
出た。

そしたところが、「さるの皮、買わんか。」
ある人が「そんなばかな、縁起の悪いもんが、
見るのもいやや。」

そして、その人が「泊めって」宿屋へいっ
て、「さるの皮、持ったものは絶対に泊めん。」
といって、それからそして、たいへん困って
川へ持っていって、ほってしても、ほってき
た。まあ、そういう話もあるです。

さるは、この白峰付近では「さる。さる。」
と、いったけど、どういう意味で付けたか知
らんけど、あんまり、さるということばは、
あんまり縁起のよいもんではないので、さる
は、ヤエンボ、ヤエンボと、いったって。ヤ
エンボとは、どういう意味でいうたか知らん
けど。

さるをヤエンボ。さるが来ると「ヤエンボ
が来た。ヤエンボが来た。」と、いうた。そう
いう名前を付けておったですね。そいでさる
というものは、なんでも去る。縁起の悪いも
んですからヤエンボと名前を付けた。

〈白峰村〉

白山の印籠石 (いんろうせき)

松尾秀邦

金沢に赴任して間もない或る日、当時理学部におられた小島和夫さんが、「白山の印籠石というのは角閃石(かくせんせき)でしてね」と数個の小粒の鉱物を見せて下さった。

成程、印籠に似た立派な形をしている高さ12~13 mm 位の角閃石の単体結晶で、表面は風化分解作用を受けて、灰色、褐色をしめし、少し欠けている処は黒褐色で玻璃光沢を見せていた。

我が国における山岳信仰地の代表の一つである白山に産出するのであるから、登頂した証拠ともなるべき手頃の御土産であろうし、名称の古風さからしても昔から有名であったと思うのであるが、彼の有名な木内石亭の「雲根誌」(1771~1801)には載っていないようである。何時の頃から「印籠石」といわれているのであろうか……

その詮策は別にして、白山山塊でこれを手にしたのは昭和27年の夏である。石川県庁で資源調査を計画されていた加藤信さんを隊長にして約2週間、白山登山道岩間側の「清浄ヶ原」に野営し、硫黄資源調査に従事した時のことである。

昭和30年に国定公園、昭和38年に国立公園に指定されている今日では、到底出来ないことであるが、清浄ヶ原の地獄谷寄りの平坦部の一角にテントを張ったのである。設営地付近は笹のある処はクロユリの群落、笹のきれた草地はハクサンコザクラの群落で、足の踏み場もない位であった。その満開のハクサンコザクラの上に笹を厚さ二尺程敷いて寝たのであるから、高山植物愛好家からみれば痛い限りであったのである。クロユリの群落も炊事場設置やら何やらで随分踏み倒した。その祟りかどうか、長雨にやられ、お陰で「閏の辰年は雨が多い」の俗説を証明した様な次

第であった。

連日の雨の休み間を見て、誰れからともなく印籠石捜しが始った。人夫として協力して呉れた尾添の方々も「印籠石なら北竜(北竜ヶ馬場のこと)辺りに仰山ある」という事で、最初はそちら方面に出掛けたが、やがて、設営地近くの地獄谷側の急斜面の風化帯の処が見付かってからは、「ガス」の一寸した晴小間を見ては採集に出掛けた。雨が上ってからも、それこそ朝食前の一仕事になった。

採集品は、巨晶、奇晶、美晶のコンクールという形でテントの中は賑やかになった。巨晶の部では半面欠けてはいたが高さ26 mmに達するものがあり、奇晶の部では完全な十字形をしめす双晶があって、加藤さんの眼を細めさせた。美晶の部は酸化鉄の被膜の為、「クロガネ」色に輝く完晶形のものが印籠石の名に恥ない逸品であるということになって、長雨のキャンプ生活もこのコンクールのお陰で退屈しないで済んだ。

安山岩の風化帯で、角閃石やその他の鉱物結晶を簡単に拾える場所は全国に数多くあると思うが、白山の印籠石と称する角閃石の結晶はそう減多なことでお目に掛かれる代物でないことだけは確かである。あのコンクールの際の見事なサンプルはその時、誰れ彼れとなく各自が持ち帰ったので、今は何処にあるのやらと気懸りになつている次第である。

とに角、白山登山を試みた多くの人々が「印籠石」として持ち帰った中には、鉱物学的に貴重な標本となるべきものがあるに違いないと思うので、もう一度、白山登山の記念品として印籠石を取出して戴き度いと思う。

それにしても、一体誰れが「印籠石」という旨い名称を与えたのであろうか。

〈金沢大学教養部〉

白山のツキノワグマ 1

冬の生活—穴ごもり

花井正光

白山にすむツキノワグマは、確かに多いのですが、その姿を自然のままに観察する機会となるとそうそうは恵まれません。夏の間は樹々の緑の下ですし、雪のある間は地上から姿を消してしまうからです。大きな体つきなのに、観察が困難ということにかけては第一級の動物と言えます。ある人は、この森の王者を、もっとも恥ずかしがり屋な森の住人だと言っています。

こんな状態ですから、その生態についてはわからぬままになっていることが多いのです。しかし、外国での研究などを参考にしつつ、猟師の人達の話や聞くなどして、少しずつはその実態がつかめるようになってきました。今回は、そのうちから冬の生活をとりあげて紹介してみます。

冬眠と穴ごもり

クマが冬眠することによって、厳しい冬を過ごすことは広く知られている事実です。しかし、冬眠というと、コウモリやヤマネなどの哺乳類のほか、カエルやヘビといった変温動物も生活環のなかにとり込んでいます。一般に冬眠として理解されている状態は、代謝作用が低下し、体温が大気の気温とほぼ同じになるまで下って、仮死状態になることをさしているようです。

ところが、クマの場合には、体温が低下するというのではなく、途中で妨害されたりするとたちまち活動をはじめることができるそうです。ですから外見では同じ冬眠のようにみえても、実際にはその性質を異にすることから、クマの場合のような冬眠を区別して、「冬ごもり」とか「穴ごもり」とよぶ方が適しているように思えます。

北アメリカに広く分布するヒグマの一種

で、アメリカグマと称されるクマで、穴ごもり中の体温を測定した例があります。夏の間、38℃前後だったのが、穴ごもりのときでも35℃位を保っていたと報告されています。その差はわずか3℃位なのです。

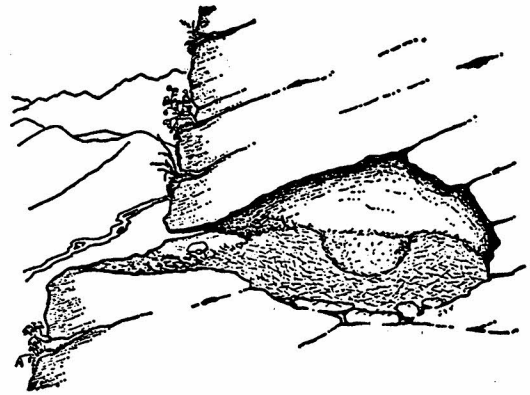
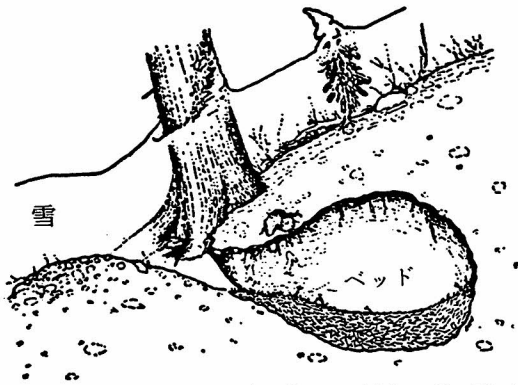
一分間の脈拍数も同時に測られています。この方は夏に60回位だったのが、穴ごもりに入ってから低く下り、最低8～10回にまで落ちたとのこと。脈拍数の方は体温と違って著しく変化しているのがわかります。

穴ごもり中は一切の食べものを口にしないし、排せつもしないのに、こんな状態で高い体温を保てる生理的なしくみはまだ明らかにされていません。夏から冬にかけて皮下や臓器の周辺に蓄積される脂肪が、重要な役割を果たしているらしいことはわかっているのですが、その機構については不明のままなのです。ただ、興味あることは、呼吸数や脈拍数が極端に少なくなるのは、クジラやオットセイのような水中の生活に適応した哺乳類の生理と似ていることです。このことが、クマの進化、適応の方向を暗示してくれそうだからです。

穴ごもりの場所と穴の構造

穴ごもりするには、十分に安全な穴が必要となります。雪や風を避けることができ、湿り気のないことがその条件になっているようです。木立ちがあるなどして風雪の勢いが弱められるような場所が選ばれ、そこにある木の根もとや斜面にできた岩の間、それに木の洞（うろ）などが穴として利用されるのです。

クマ猟のひとつに、穴ごもり中のクマを獲る方法がありますが、白山地域では現在おこなわれていないので、穴の分布やその構造に



木の根もと (左) と岩の間 (右) を利用してつくられた穴の模式図

ついて詳しくは調べられていません。春に穴ごもりから出たクマを獲る、巻き狩りとはばれる方法がおこなわれているのですが、これは別の機会に紹介します。幾人かの猟師の経験を聞いたところでは、白山の場合は岩穴が木の洞や根もとよりも多く利用されているらしいです。穴のある高さについては、ブナノキが多く分布している地帯と一致しています。クマの生活場所として、温帯性の落葉広葉樹林がここでも強く結びついている訳ですが、このことは彼等の保護管理を考えるうえで大切な指標となるに違いありません。

穴の大きさは、クマの種類や場所によってまちまちですが、クマがその中で自由に向きを変えられるだけの広さはあるようです。そして、穴の中には木の枝などでベッドがつけられていることが普通です。

こうして穴に入ることで、風雪や冷気から逃れることができる訳ですが、穴の内と外ではどれ位温度差があるのでしょうか。アラスカにすむアメリカグマでの調査によると、大気温が -46°C のとき、クマが入っていない穴で -9°C だったそうです。この穴は雪で口がふさがれていたのですが、雪が冷たい外気をしゃ断するかわりになる訳で、逆に雪を有利に利用していると言えるかも知れません。

北アメリカに生息するもうひとつのヒグマ、ハイログマの場合ですが、穴ごもりに使った穴の模式図があるので転載しておきます。

穴ごもりをはじめめる時期

秋、麓の村むらに栗や柿が実る頃になると、人里まで出てくるクマの話がしばしば聞かれるようになります。白山では、ブナやミズナラの原生林が比較的よく残されているので、そこで生産されるドングリをこの時期の餌の中心にしています。しかし、ドングリには豊作の年とそうでない年があって、不作がめだつ年には、里山に下りるクマが多くなると思われます。

長い穴ごもりを過ごすには、多量の脂肪を蓄積することが必要とされ、それまでとは比較にならぬほどの餌をとらねばならないのです。シベリヤにすむツキノワグマの一種で観察された記録によりますと、なんと体重の40%もの脂肪が秋の間に蓄積されたそうです。そして、そのクマの場合にも、餌の中心はミズナラの一種のドングリだったと言うことです。

白山でも、根雪を迎えた12月になって、雪原を歩き廻っているクマが獲られることが時折あります。こんなときのクマは、たいていひどくやせていて、皮下脂肪をもっていないそうです。十分に餌をとつて、脂肪を貯えてまるまると太った状態になってはじめて、穴ごもりに入ることができるらしいことがわかります。そして、その時期が白山地域では、山がすっかり雪化粧する11月から12月にかけての頃だと考えられます。

〈研究普及課〉

山日記

とうとう12月。5日から降り出した雪が1日あけた今日は25センチになった。白峰の各家では、軒まで丈夫な角材と板で雪囲いをして積雪に備えている。

昨年の冬を思うと、白いものを見るとぞっとするが、スキー場のリフトの動くのを見て、冬の青空も良かったなあと思なおしたりしている。

4日に岩間に行ってきた本当に良かった。尾添川は深く険しい。中宮と岩間の別れ道を、岩間に向かっては行って行った。よくバスが通るものだと感心するほど狭くカーブが小さい。ハライ谷を越え、廃屋のある尾根でトリップメーターを0に合わせゆっくり進む。蛇谷が足もとから落ちこみ、国見岳だろうか、雲の切れ目からさしこむ陽光をうけて白い輝く山稜が見える。扱い慣れぬプロニカを取り出して、国見の方と、丸石谷を中心にV字型に山腹を走る県道を写す。

山崎旅館まで来て、あんまり静かでひっそりしているので、必要な所だけカメラに収めて先を急ぐ事にした。建設省のつけた道でも見ようと思ったのである。うまくいったら岩間で野天風呂でもと、進んでいくと、なんとなだれの跡とか、角ばった岩がゴロゴロしている。いやな感じ。車から降りて石をどかしながら幅員3.5mの道をゆく。しばらくゆくと、バラバラと音を立てて石が落ちてきている。これから先はあきらめた。雲も広がって鮮明な写真はもうだめだ。三脚を持ってこなかったし、ミラーのショックも大きいからあんまりスピードを落せない。とにかく写ればいいさと二枚ほど撮って急いで逃げてきた。

今日降っている雪は、根雪だろうと地元の人には言っている。最後のチャンスに間に合っただけよかった。

〈自然保護課〉

山荘深秋

山本清嗣

山荘の

早きこたつや

紅葉冷え

架線夫の

命綱垂れ

紅葉谷

紅葉せる

樹々ゆるがして

猿群れ来

(中宮温泉にて)



能登半島国定公園

春先の旅行シーズンともなれば、女性週間誌はいっせいに旅特集となりますが、きまって対象とされる地域があります。能登半島もそのひとつでしょう。四方を海に開放された能登の変化に富む海岸景観、時国家、妙成寺をはじめとする建造物や民俗資料等の文化遺産、そして俗に「能登はやさしさや土までも」といわれるような風土が、今日の能登のもつ魅力だと思われまます。これらの興味対象地をつつむかのように海岸線に沿って帯状に指定されているのが、能登半島国定公園です。昭和43年5月に指定され、公園区域は通称外浦と呼ばれる西北海岸の海食崖景観と、内浦と呼ばれる東南海岸の沈降式海岸景観とを主体として、立山連峰を眺望できる海岸沿いの氷見、二上山、さらに半島内に点在する主要な文化財、天然記念物を含みます。その面積は約9800 haです。

このような公園区域で代表的な景観と言え、やはり外浦と内浦の対照的海岸景観と言えるでしょう。外浦では、地殻運動により隆起し、その後強い海食を受け男性的な海食崖を形成しています。猿山岬の断崖、曾々木から禄剛崎に続く海食崖は、その代表的なものであります。内浦は、これに対して沈降とその後の海食の弱さにより女性的な景観を呈し、なかでも九十九湾は沈降海岸の代表的な

ものであります。この地形景観とともに地被景観も、外浦のクロマツ林、常緑広葉樹林に対し、内浦のアカマツとウラジロガシを優占種とするアカマツ林と、それぞれ対照的な植生をみせてくれます。

このような海岸線を主体とする本公園を適正に管理してゆくには、海岸景観の維持を徹底する必要がありますが、各種の護岸工事により自然海岸は減少しつつあります。しかしながら、内浦地区の大小の入江に発達した漁港を中心として、道路と民家がわずかなスペースに密集している風景も、人と自然条件の調和のとれたひとつの海岸景観ともいえます。

利用面からみれば、本公園は半島循環道路を主体とする海岸道路公園として位置づけられ、これまでに公営国民宿舎を結んだホリデー・イン・チェーンをはじめ、自然歩道、健民休暇村等の整備がされてきました。今後は、これらの各利用拠点をも更なる有機的に快適に結びつけるため、道路を広義の公園として取り扱うようなロード・パーク構想等が考えられています。

現在、公園指定より5年を経過しようとしています。利用者の急増、公園区域内の民間資本による土地買収、交通体系の変化等、公園をとりまく社会情勢の変化は特に他の自然公園に比べ大きく、現在の公園計画では対応できない状況にあります。すでに49年度より公園計画の再編調査が進められていますが、本公園の特性を生かした豊かな自然公園としたいものです。

木ノ浦岬



自然公園に比べ大きく、現在の公園計画では対応できない状況にあります。すでに49年度より公園計画の再編調査が進められていますが、本公園の特性を生かした豊かな自然公園としたいものです。

〈石川県観光課〉

たより

蛇谷の自然保護センターは10月一杯で閉館し、今は吉野谷村市原の冬季庁舎で仕事をしています。

秋、木の葉が色づき、道一杯に舞い落ちカサコソと音をたてる枯葉を踏み、ひとしきり美しく、にぎやかに見える山々を見て歩いたのもつかの間、山々の峰が白くなり温泉の旅館も窓に雪よけの板を打ちつけ次々と下山してゆく。誰も通らない道端に散り残った木の葉がふるえているのを見ると、あの夏のにぎわいが夢のようです。

今、奥のセンターには、サルやカモシカの研究をしている人達がありますが、もう50cmも雪が積もっているそうで、この長い冬の間、山の動物達はどうしているのだろうかと思になります。

○展示について

閉館してからもう二年たちましたが、展示室がおもしろくない。何を解説してあるのか良く解らないとの意見がありました。

私たちも一所懸命考えているのですが、なかなかうまくゆきません。化石や動物、植物にしても国立公園の中なので、そう簡単にとって来るわけにもゆきません。それでもことしは金沢大学の先生方に手伝っていただいて目付谷の奥から一つ30kgもある化石をすべったり、ひっくりかえったりしながら、フウフウ言って運んできました。動物の骨も、サル、クマ、カモシカの三つが手に入りましたので来年は皆様にお見せできると思います。

その他、県鳥のイヌワシ（残念ながら中国産のハクセイですが）や高山植物の模型や写真などもたくさん入りましたので来年の5月を楽しみにして下さい。

○センターの前庭について

センターの前は砂利をひいて仮の駐車場にしましたが、お客さんの休める木陰やレストハウスがなく暑い夏の間不便でしたので、ことしセンター下流約800mのところ駐車場を作り、来年、センターの前に植物園を兼ねた緑地帯と、対岸に休憩所を作り、つり橋でつなぐ予定です。

センターへ来るのに車をおりてから少し歩かなければならなくなりそうですが、本当の美しい自然はセンターの外にあるのですから、歩いている間に美しい花が咲いていないか、どこかにリスが顔を出していないかと楽しんで歩いて下さい。